

BOOK REVIEW

「クリーン農業時代」

地球と人に優しい環境調和型農業

相馬 暁 監修

戦後の食糧難時代から、農産物の輸入も増え飽食の時代になり、今まさに、農業・農村を考えるパラダイムは確実に変化しつつある。北海道農業はどうあるべきか。そのために今何をすべきか。このような問いに対する一つの回答として、北海道の農業技術開発「変革」の予感を抱かせるものとして本書はある。道立農業試験場が中心となり北海道行政、農業団体が取り組んでいる「クリーン農業」について、分かりやすく説明されている解説書・啓蒙書である。一読者の立場からは、クリーン農業班発行の「ニュース」に掲載されていたゆかいな登場人物のヒゲおじさんとクリーン坊やの姿が消えてしまったのは残念であるが、全編を通じて親しみが持てるよう意識されており、

読者を飽きさせない。その一例は、土壌区分で、沖積土は金持ちの後家さん一家。泥炭は成金一家。火山性土は落語長屋の住人一家。洪積土は年金暮らしの元公務員一家。などという楽しいものである。

試験研究が大きく方針転換をする際には、多くの部門の協力が不可欠である。そのためにプロジェクトに関わる各部門の執筆者によって書かれた本書のあとがきでは「クリーン農業は、決して農業・化学肥料を否定するものではない。従来の農業技術をマクロナ視点から捉え直し、北海道農業の持続的発展を支える技術として再編することだ」とクリーン農業の性格が明確にされている。ここでは、本の構成を紹介して、是非読者の一読をお勧めした

いと思う。

「従来の農業技術をマクロナ視点から捉え直し」さなければならぬ背景は広範で、今まで各人が持っていた農業観を揺るがすほどである。第一章「人類は、生き残れるか」では、地球温暖化、農業、食品添加物などが扱われており、地球規模の環境問題や人間の食糧としての農産物の安全性について、きびしい現実が語られている。

今日の農業技術は従来の技術開発の到達点であり、変換すべき古いパラダイムを含む。そのため第二章「現行農業の光と陰」では、化学肥料、土壌改良資材、農業などの功罪を整理し、これらの再編成を目指して現在の農業技術を批判的に点検している。

では現在どんな形で、クリーン農業への取り組みが進められているか。第三章「有機農業と無機農業」ではアメリカのLEISA（持続的農業）と有機農業の違い。そして、その基準や国内での取り組みの例が紹介されており、技術的展望と、クリーン農業を考える際に、多くの読者が抱く素朴な疑問に答えてくれている。

最後に、第四章「北海道型クリーン農業への旅立ち」では、北海道型クリーン農業への試験課題とプロジェクト

研究体制が示されており、農業試験場が総力を挙げて取り組んでいることがわかる。

野菜・牛乳などの品目に典型的に見られるように本州が食糧供給の基盤を喪失しつつある現在、わが国の北海道農業への期待は大いに高まっている。まだ北海道のクリーン農業研究は緒に付いたばかりで成果は決して多くないが、安全な農産物を提供するための具体的研究成果は、これに続く続編で挙がることを期待したい。

また、昨年九月からhaminger NET（七戸長生氏が会長を務める北海道農業情報研究会のパソコン通信）に「クリーンレポート」が掲載され、全道に転送されていた。クリーン農業の推進は、このように新しいメディアでの情報提供の試みも同時に進められたのである。本書を読み終えた方には、本書でも触れられているが大々的なプロジェクト研究が実施されたアメリカにおける報告書である「代替農業」（農文協の一読も同時に）をお勧めしたい。（チクマ秀版社、平成五年二月二十日刊、定価一、五〇〇円）

評者

道立中央農試・企画情報室

研究職員 折登一隆